

THE KANSAI UNIVERSITY BULLETIN

Osaka, Jan. 30th, 1959, No. 323.

昭和二十六年十月十五日第三種郵便物認可  
昭和三十四年一月三十日発行(毎月一回三十日発行)  
通巻三二三号

# 關西大學學報

昭和34年1月 第323号

**關西大學**

入学試験

経済学部	一部 2月24日
	二部 25日
法学部	一部 25日
	二部 26日
商学部	一部 26日
	二部 27日
文学部	一部 27日
	二部 28日
工学部	一部 28日

地方試験 2月24日  
高校・福岡・広島・金沢・名古屋

願書受付 1月19日

---

三年次編入試験 3月21日

大学院 3月26-27日

詳細は入試要項を(送料別6円)關西大學入試係へ

学生募集ポスター

關西大學出版部

# わが国の大学における

## 社会科学研究所

合田熊平

経済政治研  
究所事務長

### 社会科学研究所の生誕

わが国における社会科学研究所として、最も古い歴史を持つものは、明治四十一年南満州鉄道株式会社によって創設せられた東亜経済調査局である。同局は当時の満鉄総裁後藤新平氏の遠見英断によって同社東京支社内に設置せられたものであつて、「広く世界経済、特に東亜経済に関する資料を蒐集整理して、これを基礎として満蒙の経済的立脚点を知り、その方向を指示すること」を設立要旨とするものであり、わが国における社会科学研究所特に経済研究所としてその嚆矢をなすものである。満鉄の附設調査機関として、その業務遂行及満蒙開発の使命達成に必要な資料及調査を提供し、他面わが国の一般経済界に有益な参考知識を送ることを任務としたのである。当時わが国には一組織的な調査機関もなく、資料の蒐集整理及調査体系の確立には、広く先進国にその範を求めめる必要があつたので、同調査局は独逸における経済学の権威チース博士を同局顧問に招聘し、同局の運営について種々その指導助成を受けたのである。かくて同局は資料の収集整備に、又調査研究に優れた業績をあげ、満蒙の開発及日本の経済的發展に大なる貢献をなした外、わが国の組織的調査機関の始祖として、最も進歩した経済的調査の組織と技術とを伝え、わが国に今日見られるよ

うな調査機関の発達に対して少なからぬ寄与をなしたものである。以来同局は満鉄をバックとして、本邦における優秀な調査機関として、敗戦に至るまで久しく斯界の重鎮として、指導的地位を占めていたのである

### 社会科学研究所の勃興

第一次世界大戦後においては、わが国の調査機関は正にその黄金時代を迎えたのであつた。それは大戦の結果、国防的及産業的見地からする科学研究の重要性について一般の認識が普及したことと、大戦によるわが国富のすばらしい増大と集中の結果として、民間において又は民間の寄付による研究所の設立が著しく増加した。戦後における社会的・経済的・政治的不安に促されて社会科学研究所が興隆し、世界戦争の教訓にかんがみて軍需関係の科学研究が設立され、産業競争に備えて大規模の会社研究所が誕生し、なお内外の危局に対応するために種々の国策的研究所の成立を見るに至つたのである。このように戦後においては目覚ましい量の躍進を遂げたばかりではなく、一方質的にも、その分化過程において、その人的物的設備において、又その研究成果において全く面目を一新するに至つたのである。この時期において大原社会問題研究所（現在法政大学内にあり）神戸商業大学商業研究所（現神戸大学経済経営研究所）東京市政調査会、太平洋問題調査会、少し遅れて大阪商科大学経済研究所（現大阪市立大学経済研究所）三菱経済研究所、東京商科大学東亜経済研究所（現一橋大学経済研究所）等の有数な社会科学研究所が続々

出現したのである。なおその他多くの調査機関が各界において設置せられ、極めて活発に活動したのであるが、前記の諸調査機関が中心となつて全国経済調査機関連合会という、先進国にもその例を見ない、全国的な調査機関の連合団体の結成が見られ、調査上の連絡提携に、資料の交換貸借に、海外調査機関との資料の交換に、講演並に見学に、年誌等の出版に、その他政府に対して調査研究に関し、或は政府刊行物の頒布について建議するなど、調査研究の効果の増進について幾多の貢献をなした。

### 戦中戦後

満州事変に入つてからは、経済的には統制経済主義、思想的には全体主義、政治的には国家主義の興隆時代であつて、当時国策的研究所といわれるもの設立が多く、その代表的なものとしては「東亜の人文及自然に関する総合的調査及研究を行う」ことを使命とする東亜研究所が創立せられ、又内閣調査局の発展した企画庁と資源局との合併になる企画院は総合的国策研究調査のための政府の研究所であらう。日支事変太平洋戦争と戦火の拡大苛烈となるにつれて、戦時体制を整える必要から、政府は国内各種主要調査研究機関を一定方針の下に綜合し、しかもそれぞれの機関の特色を国策に副うよう充分活用する目的を以つて「調査研究連盟」を組織してこれを内閣に直屬せしめ、企画院、技術院が中心となつて、各機関の運営につき連絡調整に当り、調査機関の戦時動員体制が構成せられたのである。その調査研究連盟では京阪神地区に在る調査機関を一九としてこれを近畿群と称し、その群長には東洋紡績株式会社経済研究所が任せられたのであつた。東洋紡績、経済研究所の設立せられたのは昭和十

七年九月であつて、花々しくスタートし、戦後は一時停頓のやむなき状態であつたが、本社の繁栄とともに漸次体制を整え、目下民間経済研究所として最も活発な活動をしている。

やがて敗戦とともに、戦時中活躍した国策的研究所は全部壊滅し、東亜経済調査局、三菱経済研究所の如き有力機関もその資料設備も進駐軍に接収せられて機能を停止し、企業も個人も虚脱と昏迷に陥り、世は混乱と窮乏を極め、手を施すことができなかった。殊に政府も企業も経済的困窮により、調査機関の活動は一時全く逼塞するの已むなき状態であつた。しかし戦後経営よろしきを得てわが経済力は漸次恢復し、又経済復興の早からんためにはそこに調査研究の必要を痛切に感ぜられるわけで、特に戦後はわが国経済は国際経済の強い波動を受け、海外経済との競争のためには海外事情の調査研究は一日もゆるがせにはできない。銀行業者・貿易商社等の調査機関が漸次活発な活動を初め、その後財界は朝鮮事変・世界経済の好況等に幸されて異常の進展を遂げ、調査機関もそれに伴つて充実改善せられた。殊に戦後海外との学術交流の盛んとなるに及び、わが科学の立ち遅れが予想以上であることが判つたことと、加うるに海外からは研究資料情報が盛んに流入し、研究者の生活不安も漸次緩和せられ、企業も財政的に調査研究に資金を投入し得る余裕を持ち得るようになり、かくて各般の事情も好転改善せられ、調査活動も活発な動きを示し現時に至つたのである。

以上わが国における社会科学研究所の発展のあとを一べつてみたのであるが、わが国の諸研究機関の中心をなすものは矢張り大学及其の附設研究所であつて、今わが国の大学に附置せられている社会科学研究

所の中、その代表的なものと思われるもの、即ち東京大学社会科学研究所、一橋大学経済研究所、神戸大学経済経営研究所、大阪市立大学経済研究所について、その目的、組織、機能、業績等の大要をうかがい、本学に今回開設せられた経済政治研究所の進むべき道標とし指針としたいと思う。

#### 東京大学社会科学研究所

東京大学社会科学研究所は戦後創立せられたのであるが、同大学の如き有力な大学に附置せられているがために、物的にも人的にも恵まれ、財政も比較的豊かに、研究員も多数揃つている。同所は社会科学の総合研究、即ち広く世界各国の政治法律経済の制度及び事情に関し、正確な資料を組織的系統的に収集し、且つその厳密に科学的な比較研究を行うことを目的とし、一つには単なる理論的研究に偏ることなく、実証的研究に重きをおき、所謂実態調査の方法をも採り入れ、二つには政治学法学及び経済学等の個々独立の研究に陥ることなく、中間領域の研究をも含めてその総合研究を、更にまた、各国の単なる地域研究に止まることなく、その比較研究特に本邦との比較研究を達成することを期しているという。

研究部門はアメリカ、イギリス、本邦公法、本邦内政、本邦経済産業、ソヴェト連邦、本邦財政金融、社会調査、本邦私法、中国、フランスの十一部に分け、四十数名の専任研究員が各部門に所属して研究に専念している。その研究成果は社会科学研究(季刊)社会科学研究所紀要、社会科学研究所双書等として発表せられる。

#### 一橋大学経済研究所

次に一橋大学経済研究所であるが、同研究所は東京

海上火災保険社長故各務謙吉氏の遺産の寄付による各務奨学基金の援助により創立せられたものであるが、同研究所の一覧によると、経済研究所の研究方針は経済学の分野において、研究所としての機能を十分生かすことにある。研究所としての機能とは、われわれの場合、共同的な研究作業を通じて成果をあげようような研究や、講義の負担なく特定の研究を貫くことによつて成果をあげよう研究(実態調査を広範囲に必要とする研究や講義には適しないような特殊問題の研究等はこの部類に属する)をとおして、社会科学としての経済学の発達に資することであると考へる。なお大学の教育活動がより専門化された分野についての指導を含むようになるにつれて、研究所がその採り上げている研究題目の範囲内において、研究と教育とを融合した形の活動を行うことは、研究所本来の機能を一層有効に生かすものといつても差支ないであろう。と述べている。その機構は研究部、資料課、統計課、庶務部に分れ、研究部門としては、国民所得と再生産、日本経済の実証的研究、アメリカ経済、ソ連経済、統計学およびその応用、学説史および経済史の研究、英国および英連邦経済の研究、中国および東南アジアの八部門を持つている。

前所長であつた都留重人教授は、同所研究双書の序言に次のようなことを述べて居られるが、研究所の研究指針を示唆するものと思われるのでここに掲記する。それによると「経済学はいつも模索し、試作し、作り直すという仕事を、性こりもなく続けなければならぬ。経済研究所の存在意義も、この点にこそあると思われる。私たちの研究所も、一つの実験の場である。あるいは所詮完全なものとはなり得ない統計を、すこしでも完全なものに近づけることに努力したり、あるいはその統計を利用して現実の経済の動きの中に

發展の法則を発見しようとしたり、あるいは分析の道具そのものを磨くことに専念したり、あるいは外国の經濟の研究をおして日本經濟分析のための手がかりとしたり、あるいは先人の究めようとした原理を追求することによつて、今日の分析のための参考としたり、私たちの仕事はきわめて多岐にわたる……」と

同所の成果は經濟研究(季刊)經濟研究双書(年三回)歐文經濟研究双書、新着資料目録、解説經濟統計、特殊文献目録等として発表せられてゐる。

#### 神戸大学經濟經營研究所

次に神戸大学經濟經營研究所は、神戸市に在る貿易商兼松株式会社よりの研究所に充てる建物の建設と研究資金の寄付により設立されたもので、同社の創立者故兼松房治郎翁の遺徳を顕彰せんとする同社内にある兼松翁記念会よりの援助によつて大正十年生れ、その施設はハーバード大学に在る Bureau of Business Research を範としたもので、設備は最も完備して居り、わが国の大学に在る社会科学研究所としては、恐らく最も古い歴史と最も良い設備を持つものである。同研究所は産業經濟に関する學術的綜合研究を行うことを目的とし、殊に阪神間の立地条件にかんがみ、研究分野を大別して、國際經濟と産業經營に分け、更にそれぞれの分野に相應研究部門をおき、輔々相俟つて産業經濟の全面的研究を行わんとするもので、研究部門は國際貿易、海事經濟、國際金融、國際經濟法制、企業經營、經營經理、産業勞働、産業合理化等に分れ、なお研究部門の外に特殊研究として、各部門を横に貫いた綜合研究組織があり、國際經濟の分野においては、アジア經濟研究及中南米研究の二組織、産業經營の分野においては、会社經理研究の一組織があつ

て、専任研究員、大学の兼任研究員、それに学外の識者も加えその協力を得て、部門研究と綜合研究とは共に毎月一回研究報告会を開催し、その結果は研究年報、月刊國民經濟雜誌又は単行本にて発表されてゐる。

同所は戦前多くの研究成果を世に送つた。商業研究所論集、同双書、同彙報、同講演集、重要經濟統計(年報)同月報、世界貿易統計、經濟法律文献目録、商工經營特別講義、海外旅行調査報告(年報)高等商業教育調査資料、懸賞当選論文、國民經濟雜誌(月刊)等実に多種に亘つてゐる。その他毎回数回神戸市において、時には大阪市にも進出して公開講演会を開催し、別に商業研究会と称して、各業界の実験家を招聘して、研究員との研究会をも催してゐた。なお夏季休暇を利用して学生を海外各地に見学旅行に派遣し、毎夏二十数名を鮮滿から中華北、中、南地方、フィリピン、インドネシア、ベトナム、タイ、マライ、ビルマ印度、遠きはハワイ北米合衆國にも及び、その調査報告は纏めて報告書を作成されている。又学生及卒業生から毎年懸賞論文を募集して研究の奨励を行つたが、応募者は毎年多数に及び優秀入選論文は印刷刊行してゐる。更に同所が多年に亘つて国内外から収集した小冊子を中心とする数万の調査資料と各種統計書、数千冊の新聞記事切抜の合本、同じく会社考課状は実に貴重な得難い文献であろう。

又同所は前述の全國經濟調査機關連合会の理事、関西支部長として長年に亘りその勞をとられ、調査機關の發達に大きな貢献をなしてゐる。

現在機關誌としては、明治三十九年創刊の歴史を持つ國民經濟雜誌(月刊)をズット継承し、他に國際經濟研究、企業經營研究、Review of Economics and Bus-

iness Administration (何れも年刊)を持ち、その他アジア經濟研究双書、中南米研究双書、中國經濟情報等を刊行してゐる。國民經濟雜誌は巻末に文献目録を掲載し、多年に亘り学界に大きな寄与をなしてゐる。

#### 大阪市立大学經濟研究所

最後に大阪市立大学經濟研究所であるが、同研究所は昭和二年大阪市の実業家野村商店主野村徳七氏が母校のためになした百万円の寄付によつて設立せられたもので、嘗ての同研究所の一覽にその使命として印刷されたものをここに引用してみると「凡そ經濟現象の考察をなすに當つては、理論的討究を怠つてはならぬことは勿論であるが、それとともに、事象そのものの精密にして確實な認識と、その變動推移の状況を明かにする実証的な調査研究も、また欠くべからざる所である。然るに従来わが國においては、確實な資料を豊富に収集整理し、これに基いて実証的な調査研究をなすための充分な組織と設備とを有する機關が極めて乏しかった。尤も多数の銀行会社には調査部、調査課などと名づくるこの種の機關があるにはあるが、多くは自己の營業のための補助的な若しくは指導的な機關であつて、自由な立場のものであり得なく、且つその大多数は規模も小さいようである。又官公署、学校等にも調査課、研究室などといわれる調査機關があり、中には相當に豊富な資料を収集して居るものもあるが、これとでもどちらかといへば、資料を死蔵する嫌がないでもないように思われる。あえてこの欠を補うという意味でもないが、しかし大いにその点を考慮してわが研究所は、一方には努めて豊富に資料を収集し整理するとともに、他方同時にこれを活用して、最も自由な立場から各方面の經濟問題を、なるべく実証的に

考究し、或は単行本とし或は又雑誌上の論文として、世に提供することを任務とせんとして生れたものである。なお又、文献目録、辞典、年表類の編さん、資料の公開に依つて、調査研究上の便宜を図ることをも任務とせんとするものである。従つてその調査研究は、抽象的な理論よりも実証的な方面に、一層の力を注ぐ方針をとつてゐること、又本所が大阪市の設立に係る関係からして、調査研究はなるべく大阪市に深い関係がある問題を取扱うの方針を採つてゐる。しかし必要な場合には、より広い立場を採ることもあるという。

その機構も当初は調査部、編集部、資料部、事業部の四部分に分れ、調査部は更に金融、企業経営、商品市場、証券市場、貿易、社会問題及社会政策、財政、大阪市経済史、景気の九担当に分れて、研究員が配属されてゐた。かくて本所も財政的にも又研究員にも恵まれ、戦前多くの業績をあげたが、その中調査報、経済時報（共に月刊）経済学辞典、経済学文献大鑑、世界経済大年表、大阪商業史料集成などはその著しいものであり、又、資料一覽、内外雑誌重要記事索引等は特に学界を裨益したものである。

敗戦後は同大学が進駐軍に接收されたため研究員も離散するといふ悲運にあつたのであるが、大学当局の努力によりいち早く再建せられ、目下同所は専任研究員十七名、経済・商学両学部部長老教授で研究員の指導的役割を持つ兼任教授が六名おられ、研究部門は日本経済班、国際経済第一班、国際経済第二班と大きく三班に分れ、日本経済班は企業経営、金融、貿易、中小企業、軽工業、重工業、労働、農業経営、農業政策に、国際経済第一班は景気変動、東南アジア経済、アメリカ経済、アメリカ経済（企業経営）、アメリカ経済（原子力問題）に、国際経済第二班は中国経済（財政）、

中国経済（工業化）、ソヴェト経済と更に担当分野を定めて研究を進めておられる。やがてその成果も近き将来に続々発表せられるであらう。戦後「社会科学文献解説」―「経済学小辞典」の如き極めて多様な極めて多様な編集刊行がなされたのも同所なればこそと思われる。他に理論的研究叢書として「経済研究所報」、重要な地域産業の実態調査シリーズ、経済学雑誌は戦前より引続き機関誌として現在も刊行せられてゐる。長い歴史を持つ経済学文献月報は目下は「経済評論」の巻末に掲載せられてゐる。

## 終りに

以上あげた四大学研究所の中、その三大学が何れも戦前は商科大学であり、商業学が他の社会諸科学に比し、より社会事象、特に経済現象の動きに敏感であつて、いきおい、経済事象に対する分析解明、実証的研究が行われたわけで、そこに、その必要から研究所の出現を促がし、且つ、そうした調査研究の必要を痛感した実業家の特志による寄付金に拠つて創設せられたことである。以上三大学研究所は過去においては輝かしい業績を上げたのみならず、今日においても優秀な代表的な研究機関として、今後ますますその発展を期待せられる。一橋、神戸両大学においては今後大学の向上発展に備えて、同窓会（一橋は如水会、神戸は後援会）が学内の研究施設を更に整備せしめんがために、何れも数億に及ぶ援助寄付金を醸出し、大学の研究活動を側面より支援することにしてゐる。まことに羨望の至りである。アメリカにおいては研究機関に対する実業家の援助寄付が多く、研究所はそれに拠つて活発に運営し業績をあげている。ロックフェラー、フォード、カーネギー等の財団の如き、わが国においてもその恩恵に浴しているものもあり、その他実業家富豪の大

学研究所に対する援助寄付は極めて多く、アメリカの大学研究所の発展する大きな支援となつてゐる。

## 海外の大学より

### B・I・Mに

#### 団体会員として加入

イギリスの経営協会 (British Institute of Management) の団体会員 (collective subscriber) の資格で、本学が、大学として、本年一月より加入することになった。

B・I・Mは、ロンドンに所在し、イギリス文部省の外廓団体にて、経営者再教育等経営に關して教育指導する、この分野ではイギリスにおける最高の權威ある協会で、従つて、その団体会員も従来は大英帝国内の諸団体にのみ限られていたのであるが、一昨年渡英した商学部植野教授の斡旋で特に団体加入を認められたもので、おそらく、わが国で大学が加入したのは本学が初めてであらう。

団体会員としての特典は、同協会刊行機関誌“The Manager”の頒布を受け、同協会主催の会議、セミナーや教育に割引料金が参加でき、また、大英帝国を訪問する際、いろいろと勸告を与え、必要に応じて特殊分野のエキスパートに引見するよう推薦方斡旋してくれることになつてゐる。従つて、今後本学の留学生にとつて便宜が与えられるであらう。

なお因みに、本学が、大学として、外国の学協会に団体加入したのは現在のところ、曩のアメリカ大学P.R.協会 (American College Public Relations Association) とこの協会とである。

# 学内報

## 臨時評議員会並に互礼会

学校法人関西大学寄附行為第十八条第三項による臨時評議員会は、一月十七日（土）午後三時より天六学舎において開催され、左の議案につき審議した。

- 第一議案 寄附行為中一部改正に関する件（短大廃止）
- 第二議案 土地交換に関する件
- 第三議案 予算外義務負担契約に関する件（工学部実験実習場建設費）
- 第四議案 昭和三十三年度学校法人関西大学収支補正予算に関する件（高連道路路学内通過反対本部経費）

なお、臨時評議員会後引続いて、互礼会が和やかに催された。

- 出席者（敬称略、五十音順）
- ・阿部甚吉 池田信之助 今井康兼 岩佐清三郎 植野郁太 浦野健二郎 江里口春志 越智比古市 大島武夫 大森俊次 岡野留次郎 榎本信雄 門上敏夫 神宅賀寿恵 寒川喜一 川口勇 小寺小市郎 小林巖 佐伯五郎 白川朋吉 関豊馬 竹沢喜代治 戸根泰雄 中石清一中務平吉 長柄金吾 浪江源治 仁尾常寿 西尾専太郎 西村治三郎 西本寛一 野間秀泉 東浦栄一 久井忠雄 福島四郎 堀正人 松原藤由 三島律夫 水谷揆一 宮崎平 三好万次 村尾静明 村上精三 矢口孝次郎 保井剛一 矢野文

山崎敬義 横田健一 吉田一郎 吉田鹿之助 吉富二郎 脇野徳三郎

## 新年交礼会

一月六日（土）午前十時より、理事長吉長事務代行はじめ、大学関係者の新年交礼会が恒例の通り行われた。

## 人事異動

昭和三十四年一月七日 教授 矢口孝次郎  
学長事務代行を解く

## 東洋紡績株式会社経済研究所より

### 図書資料寄贈

東洋紡績株式会社経済研究所より本学経済政治研究所へ、今回同所所差図書資料の中、年鑑・年報・統計・辞典・文献目録その他図書資料千五百余冊（目下整理中）を寄贈せられた。

同所は民間会社を持つ経済研究所としては本邦唯一のもので、繊維経済に関する調査研究を行うことを目的とし、本邦繊維産業の発展に少なからぬ貢献をなしている。

同所の厚意に対してはまことに感謝に堪えない。衷心満腔の謝意を表したい。

（合田）

## 顧問内藤正剛氏逝去



本学顧問内藤正剛氏は、かねて病氣療養中のところ一月二十二日午前九時四十分、大阪大学付属病院で心筋こう塞で逝去された。七十五歳。

葬儀は同二十四日午後一時から南区中寺町の本覚寺でとりおこなわれたが、理事長白川朋吉氏を葬儀委員長として学長、理事、監事、評議員ならびに校友会々長、副会長、正副部長が葬儀委員として参列した。遺影をまつた祭壇には政界、法曹会、実業界など各方面からおくられた供花にうずもれ、寄せられた弔辞は日本弁護士会長、大阪弁護士会長、自民党総裁、大阪府知事、大阪市長、松下幸之助氏など多くを数えた。

内藤正剛氏は明治十六年岡山県で生まれ、同三十七年本学の前身関西法律学校を卒業された。同四十年、判検事登用試験に合格、翌四十一年弁護士を開業、法曹界に活躍された。のちに大正十五年、大阪府会議員の当選、昭和二年まで府会議長をつとめ、同四年六月大阪府会議員にも当選された。つづいて同七年から連続

三回衆議院議員を歴任。十六年には衆議院建議員長をつとめ、さらに昭和三十三年、弁護士開業五十年の輝かしい表彰を日本弁護士連合会長からうけるなど、法曹界はもろろん政界においても重きをなした。一方教育界につくした功績は大きく、本学のこんにちにいる発展のみちも内藤正剛氏の尽力によるところ大なるものがあつた。

氏は大正七年十二月、社団法人関西大学社員となり大学令による大学昇格拡張にともなう校舎敷地選定委員となり、三島郡千里山に約一万五千坪をえらんだことが現在十万坪におよぶ千里山学園の発端をなすものである。昭和三年には天六学舎建築委員となり（同四年竣工）同四年三月関西大学監事、同五月理事にえられ、以来二十二年まで重任されたこの間、専門部一部の開校、天六学舎の増築、大学予科校舎（現第二学舎）の新設、関西工業専門学校の開校など本学の伸展に大きな功績をのこされた。昭和三十一年、本学の長老として顧問におされ終生母校の繁栄を念じること忘れなかつた人だけに校友会顧問中務平吉氏も「奥歯が一本ぬけた思いがする」と、氏の逝去は本学関係者からいたく惜まれている。なお生前の功績により従四位勲三等瑞宝章を追贈せられた。

# 昭和三十三年卒業論文題名 (1)

## 文学部

文学部では、毎年卒業に際し卒業論文を提出することになっているが、昭和三十三年卒業論文の論題提出者数は別表のごとくで、また一月十七日に提出された論題は次の通りである。

科別 区分	一部							合計
	英文	国文	哲	仏文	独文	史	新聞	
卒業論文者	130	108	10	15	7	61	181	520
論題提出者	118	88	3	11	4	52	173	455

  

科別 区分	二部							合計
	英文	国文	哲	仏文	独文	史	新聞	
卒業論文者	56	54	13	6	2	21	20	173
論題提出者	46	42	9	4	2	20	17	141

一 部  
英文学科  
Ernest Miller Hemingway の作品

「老人と海」(The old man and The sea) についての研究

赤沢 正士  
「作品から見た民衆作家としてのディッケンズ研究」 秋野 貢  
シェクスピア作品中近代性的見地より  
マクベスとその夫人について  
浅田 勇夫  
Joseph Conrad の研究 有本 富蔵  
R.W. エマソンについての一考察 畦倉 英雄

John Donne の研究 — 社会的背景並びに女性深究について — 石川 由子  
ジョン・スタインベックの「エデンの東」を通じての宗教的意義 石倉 宏宣  
Oscar Wilde の研究 石田 彦嗣

作品「Gullivers Travels」において Jonathan Swift 自体の人間性と性格表現物語の構成等を考察す 伊藤 茂

ワイルドと「ドリァン、グレイの画像」について 井上 忠清  
ヘミングウェイ作品 武器よさらば 今井 治  
ディッケンズ研究(大いなる遺産を中心とした) 岩井 輝晃  
W.S. Maugham の青年時代の人間感 岩崎 文徳

ヘミングウェイと彼の作品研究 上崎 英士  
William Wordsworth の少青年期と彼の作品「The Prelude」 上田 忠昭  
Ernest Hemingway の「老人と海」の作品研究と映画について 上田 芳太郎  
ジェイムズ・ジョイス「ユリシーズ」 上西 誠一

Ernest Hemingway の作品に就いて (特に A Farewell to Arms を中心として) 上畑 聡  
William Faulkner の世界 — The Wild Palms を中心として — 上原 麗子  
シェーン、オースティンと作品「高慢と偏見」について 上間 八重子  
A. Huxley の作品に於ける思想の推移 大井 平一  
シェクスピアの作品「マクベス」に就いて 大枝以佐雄  
Oscar Wilde 著「ドリァン、グレイの肖像」研究 大谷 寛

E. M. Hemingway とその作品 老人と海について 大塚 明夫  
シェクスピアの英語研究 岡野 直人  
ヘミングウェイ 武器よさらばに於ける戦争と虚無感に就いて 小倉 清

キプリングと幻の人力車 折井 弘幸  
Lady Chatterley's Lover by D. H. Lawrence (Complete unexpurgated edition) の方言の研究 岡本 寛郎  
「スタイルから見たヘミングウェイ作品研究」 小幡 良夫  
Thomas Hardy の「Tess」に於ける Wessex 方言中の Verb について 鍛冶田 実

「オニール」について 河内 政則  
ヘミングウェイ「老人と海」の映画化について 川俣 光男  
Look, We have come through と D. H. Lawrence について 川井 正弘  
ヘミングウェイの作品(人と作品の関連性における)研究 喜多 均  
「ロザモンド、グレイ物語」に就いて 北村 成一

Graham Green の作品における思想と人間像 北野 雅隆  
ヘミングウェイの作品と彼の文体研究 木野 隆夫  
作品「帰郷」に於ける自然と人間性 清水 一正  
「獄中期」を通してのワイルド 熊井 進

悲劇「Macbeth」におけるマクベス夫妻の行為及び性格描写についての一考察 草薙 勝彦  
「英国地方語の研究」 楠崎 渉  
Tennessee Williams と彼の描く人物について 小寺 靖子  
アーネスト・ヘミングウェイの作品と彼の人生観について 高照 賦

「The old man and The sea」を中心に E. Hemingway 作品研究 小橋 信夫  
サマセット・モームと彼の作品 小林 康三  
William Somerset Maugham の性格と思想 子守 秀和  
F. Scott Fitzgerald とその作品 “The great gatsby” についての一考察 坂本 盛一

Ernest Hemingway の "The Sun Also Rises" の書かれた前提、構成と結果について 佐久間 優

オー、ヘンリー研究 佐々木豊三郎

ラフカディオ、ヘルン作品研究 佐々木 実

A study of Hemingway and his boyrnyne stories 杉本 義治

Eugene O'Neill, The Man and His Plays 銭谷 正成

ヘミングウェイと作品「武器よさらば」についての研究 棚倉 輝二

現代米文学の巨匠ヘミングウェイの彼と作品 高橋 阪吉

E. Hemingway, A Farewell to Arms 高浜 博敬

Thomas Hardy 研究 財田 亮明

オニールの遺作 Long Lay's Journey into Night 竹田 和子

Of mice and Men に於ける Steinbeck の文体と内容 辰巳 節三

The Red Badge of Courage の心理描写について 谷垣 隆一

「トーマス、ハーディ」の "The Dynasts" の芸術的特徴 田中 正也

ヘミングウェイの武器よさらばにモームと彼の作品「月と六ハンス」に於ける人間性の追求 福岡 良弘

The private papers of Henry Rycroft を通して見た George Gissing の classic nature 辻井 将男

ヘルン失楽園の文学的価値を論ずる 辻本 昭雄

"Lady Chatterley's Lover" に用いられた英国中部方言の人称代名詞について 坪田 武

Milton とその詩論 寺石 吉宏

ヘミングウェイの文体研究 寺本 伍

「トーマス」の shall, Will に就いて 豊永 彰

Thomas Hardy の作品研究「ダンバイル家のテスの悲劇」について 中谷 勉

英語動詞の時制研究 中谷 弘

Shakespeare "Macbeth" に於ける人稱代名詞 (thou & you) についての感情的変化の一考察 中西 英夫

ヘミングウェイの作品研究「武器よさらば」について 永井 安治

Lafcadio Hearn ホーンの思想と文体 仲田 勝洪

小泉八雲(ラフカディオ・オノン)と日本著書にみる心境の変化 中谷 武弘

トーマス、ハーディ「帰郷」における自然と主要人物の性格について 内藤 晴夫

ハーディと「郷人の帰りに」について 西 俊彦

作家としてのヘミングウェイ研究 西後 茂

Thomas, Hardy の「テス」について 畑山 実

W. S. Maugham の戯曲感について 原田 健

マーク・トウエイン小論 橋本 秀之

E. Hemingway, "A Farewell to Arms" についての研究 林 勝彦

作品研究「武器よさらば」平野雄二郎 George Gissing の諸作品中に現われた彼の性格研究 福井 康夫

文学に対するモームの姿勢及び作品「月と六ハンス」研究 福辻 三郎

シェイクスピア作品研究(マクベス刊について) 福美 正

モームについて 船戸 宏志

On John Steinbeck 藤本 忠男

ディッケンズの作品研究 福木 寿潮

Subjunctive Past Perfect について 増田 則文

Thomas Hardy の「テス」を用いたれた Wessex 方言の Personal Pronoun について 松尾 卓爾

作品研究 James Joyce の "Ulysses" 松岡 昭夫

シェイクスピア作品研究 Macbeth に於ける Lady Macbeth の一考察 松田 英造

古代英語の屈折の行方と現代英語に於ける残存 松元 敏子

ハムレットの性格描写の研究 Shakespeare 作 松本 伸一

「アーネスト、ヘミングウェイの文学論」 御喜田 俊

テネシー、ウィリアムズの作品の主人公達の現実逃避について 水谷 誠

Joseph Conrad に於ける海と人間について 三宅美智雄

Definite Article (定冠詞) の研究 水谷 取

ヘンリーについて 村田 耿

Hardy と Wessex 描写 森田 修一

T. Williams の人と作品 Cat on a Hot Tin Roof 森原 康博

ヘミングウェイの人と作品について 森脇日出男

エリオットにおける批評の問題 八木 治男

「バックルベリー、フィン」の冒険に見られるマーク・トウエインの性格について 矢沢 一雄

T. Hardy と彼の作品「ダアバウイラ家のテス」について 八張 一武

ヘミングウェイ著「日はまた昇る」の作品構成について 安井 利昭

「キリマンジャロの雪」の一考察―危機感を主として― 安福 保

A study of French Loan - Words used in "The Knights Tale" by Chaucer 山崎 純一

T. Hardy の作品「帰郷」について 山中 智

「クライド、グリフィース」に現われたドライザーの悪魔派 吉田 忠稔

ハックスリ(Point Counter Point)批判 米田 繁男

トーマス、ハーディ研究 石田 一男

ロレンス序論―思想について― 金谷 惺蔵

Charles Dickens 著 David Copperfield に示された Dickens の性格 口野 晃

On Macbeth and Lady Macbeth 栗田 一衛



Dickens 作品「David Copperfield」  
より笑と涙 家間 宜男

A study on Poe's Prose Tales 富田 明

非人称代名詞の「の」考 中塚 正義

国文学科 島木健作と「生活の探求」について 飴谷 精

「能」と「近代能楽集」 粟津 牧夫

西鶴論 飯塚 芳正

北村透谷について 池崎 観治

三馬に関する研究 石田 彰

漱石と「道草」について 伊藤 俊郎

私観 三島由紀夫 伊藤真木之

菊池寛の短篇小説 伊原 隼

現代文学に与える新古今の価値 今井伊佐雄

近松門左衛門「堀川波の鼓」―お種を中心として 今中 三郎

西鶴文学にあらわれた町人世界について―日本永代蔵を中心として― 上島 俊宏

日本永代蔵について 植村 俊一

西鶴町人文学論 大門 靖央

「川柳と洒落本」 大坂 芳一

物語文学の成立過程 大田 幸作

西鶴一代男について 川北 孝男

井原西鶴研究 加藤 博史

小林多喜二―「不在地主」の新しく呼ばれるもの 木内 宏治

岩野泡鳴「五郎作」考 久保田玲子

倉田百三論―女性観の変転を中核として 桑原 主明

堀辰雄の芥川龍之介に係る平安朝擬古文学に於ける継承技術に就いて 小谷 克己

日本永代蔵に描かれた町人道德と西鶴 小林 邦生

藤村「破戒」に到るその作品の展開について 近藤 篤平

近世初期歌謡について 崎尾 徹

世阿弥作品研究―「花伝書」の考察について 島地 孝治

古事記に於ける説話文学の研究 菅原 勝美

西鶴の詩的精神 関谷 旭

已然形に「や」の添うた形 私見 宗田須弥子

「斜陽」の敬語意識 高島 利雄

「漱石と ころも」 高見 桂三

平家物語における仏教思想の一考察 武内 睦夫

「二葉亭四迷論」 竹末 静枝

「則天去私」について「明暗」を中心として 竹中哲一郎

「方丈記とその思想」 辻本 長嘉

「国性爺合戦の虚実性」 寺崎 幸信

森嶋外と作品「キタ セクスアリス」に關して 中島 昭

日本永代蔵について 仲田 恭朗

「西鶴論」 中谷 四郎

町人西鶴―好色物に表われた町人(西鶴)文学性 永易 敬三

井原西鶴に関する研究 西 長男

田山花袋―「蒲団」を中心にして 西川 幸男

平安時代の文学について 西尾 正義

自然界と芭蕉 花咲 広祐

西鶴の作風と近代文学へ及ぼす影響 原田 治郎

「西鶴の町人物について」平岡 勲

森外外のロマンティズムについて 広島 仁博

落窪物語について 福島 朝美

万葉集に於ける庶民性に就いて 藤川 寿一

島崎藤村「破戒」について 藤田 登

大幸治の作品研究 別役 隆三

処女塚論 本田 文生

西鶴に於ける町人の経済観念 森川 則彦

日本永代蔵について―町人生活に於ける致富観を主に― 山脇 興三

小林多喜二と革命文学 吉田 永宏

清少納言について 井口 松茂

西鶴の置みやげ 大橋 雄

芥川龍之介論 岡本 昌行

文学(文学と政治、文学と社会、文学と思想、文学と教育) 大谷 治

芥川龍之介の王朝文学―考察 岡村 謙

松尾芭蕉―史料紀行― 嘉納 広治

夏目漱石論 岸田 武一

芥川龍之介の比喩の成立に就いて 小谷 道雄

芥川龍之介論 初期の作品を中心に 斎藤慶太郎

古代の恋愛観 塩山 弘

藤栗毛考 渋谷 康伸

浮雲論 白川 信夫

啄木の生涯と啄木文学の大家性 末広 嗣夫

石川啄木論 竹田 修

織田作之助と彼の作品論 田中宏之介

島崎藤村の「破戒」論 和本 正之  
近松と歌舞伎狂言・浄瑠璃について 油納 成典

哲学科

カントに於ける道徳形而上学の解明 荒閑 周治  
ヘルグソンの道徳と教育 南部 敏行  
広告の前提となる心理学の諸問題 松若 鉄雄

仏文学科

カミュ「異邦人」について 阿部 武  
ジャン・ヌイのドラマとその登場人物について 井上 武志  
スタンドールとその作品 馬田 孝彦  
G. FLAUBERT 小論 岡本 光弘  
Flaubert の「Madame Bovary」に於ける discours indirect 法の用法について 大内 伸勝  
R. Rolland: Lame enchantée に於ける愛の精神 志田 亨  
モリエール作品「守銭奴」研究 田中 清  
デュマ、フィスとその作品研究について 榊井 啓三  
Andre Gide 論—背徳者をめぐって— 安田 美昭

独文学科

Über „Der Tod des Empedokles“ エムペードクレスの死について 加藤 元規  
アルツール、シユニツラーと彼の短

篇小説について 西田 二郎  
Droste-Hülshoff の「Die Judenbrot-he」 沖本 竜夫  
グッセの Peter Camenzind の作品について 清水 実

史学科

近世「農民の統制について」 愛宕 武正  
助郷制度に基く農民紛争について 伊東 利勝  
近世の町人について—思想的にみた町人意識— 石崎 芳忠  
地方史「播州三木に於ける金物史について」 岩城 周昌  
近世に於ける農民の逃散とその還住政策 小川 惇  
植木枝盛における社会改良思想について 長船 朝子  
近世封建都市形態の類型—特に堺の市街構造と、機能性に関する諸問題の観察— 風 完治  
塔の発達について 川崎 英三  
海駅 室津本陣 北野 舜平  
「豊臣秀吉の耶穌教禁制に就いて」—直接的、間接的要因の考察— 木村 健治

石棺製作の意義について 久保田福大  
鎌倉幕府の対公衆政策 越野 正憲  
自由民権論における共和思想 小山 節子  
戦国時代の交通について 佐藤 瑞夫  
日本神話の一考察 鈴木 季紀  
近世初期の日本交渉考 杉野みさ子

平安朝の文人貴族について 瀬川 巖  
元祿文化 関口浩一路  
近世農民思想 慶安御触書に見られる保護的思想 竹内 秀司  
郷村制度の成立について 竹内 宏行  
吉田松陰の思想に就いて 千頭 仁広  
鎌倉時代に於ける家族制度 戸田 登  
律令時代の仏教 永野 俊樹  
武士道起源の一考察 橋本 秀弥  
明治維新期における農民—撥について 早野 守  
徳川幕府の対朝廷政策について 二田 秀臣  
「近世の農村と農民生活」について 松宮 久夫  
能登の国郡と地名 円谷 受学  
江戸時代に於ける宿場と城下町の発展について 宮本 明  
交渉史上における古墳時代の性格 村津 弘明  
田沼政治について 森本 十郎  
法隆寺の壁画について 安井 猶広  
江戸時代の町人生活について 尾形 和夫

近世に於ける株仲間成立過程について 藤原 浩  
南京事件より「四、一二」に発展せる国民党内のブルジョア化の問題 赤松 弘之  
前漢末に於ける商売について 大西 重一

西安事件 笠原 修二  
コミンテルン及び共産派より展望せる武漢政府の特質 柏木 繁男  
北魏末に於ける政争とその性格 岸口 好広  
専売制より見た西漢経済の動向 齊藤 栄一  
唐代貴族政治についての一考察 田中 勲

後漢に於ける宦官と清流派官僚との対立 平岡 透  
三皇五帝説について 福田 正幸  
季立三コースの方向転換 藤原 昇  
第一次国共合作に於ける理論的背景 (新三民主義とマルクス、レーニン主義の結合) 朴 聖範  
革命前夜の France 農民—農業資本主義化体制の進行と封建的諸権利をめぐる対向的な二つの動向— 片岡 敬直  
19世紀以後の英国植民政策と民族運動について 黒崎 照包  
フランス革命期に於ける議会とコンドルセの教育計画 田村 雅弘  
ロベスピエールとジャコバン党 野村 隆雄  
ラッフルズ(その生涯と植民地経営について) 福山 雅彦  
フイレンツェ自由都市の発展 北川 治  
オリバー、クロムウェルについて、主にイギリス革命における1649年から1655年まで 寺原 順子



校友バツジ

校

友

### 校友会の動き

- 三日 関甲クラブ総会
- 六日 東成支部総会
- 七日 生野支部総会
- 八日 大阪市内中学教員関大会代表者との懇談会
- 九日 事業部会
- 十日 常議員会
- 十三日 川西支部総会
- 十四日 東淀川支部役員会
- 十四日 姫路支部総会
- 十五日 財務部会
- 十七日 大阪市役所支部東区分会総会
- 十八日 広報部会
- 二十二日 尼崎支部総会
- 二十四日 十三会

### 東成支部総会

大阪東成支部では十二月六日午後六時から東成市民館で本年度総会を開催した。この日は大学から白川理事長が来賓として出席、支部の発展をよるこぶ祝辞を述べた。また校友会からも榎本副会長、門上組織部長が出席、校友会の現状報告を行った。

また名神高速道路千里山学岡通過問題を検討した結果、絶対反対の決議を行った。そのあと全員で和やかに懇親会を開いて親交を深め午後九時半に散会した。

### 生野支部総会

大阪生野支部では十二月七日午後六時から桃山荘で本年度総会を開催した。この日は校友会から榎本副会長が出席、挨拶と激励の辞を述べた。

席上、本支部は大阪市の中心部からやや離れたところにあり地域も比較的広範囲にわたり会員相互の連絡が不便なため活発さにやや欠けた嫌いがある実情が問題になり、対策として小学校区別に地域幹事をおくことに決定した。その後懇親会に移り今後の協力を約して午後九時に散会した。

### 市内中学教員関大会

#### 代表者との懇談会

大阪市内の中学校に勤務する校友の関大会が結成されたが、十二月八日、その代表者と校友会との懇談会が行われた。席上中学教員にまだまだ関大出身者が少いことが指摘され、その対策や関大会の発展について意見が続出した。また校友会の協力の必要なこと等も問題になった。

### 常議員会

校友会では常議員会を十二月十日、午

後六時から大阪府職員会館で開催。

### 姫路支部総会

姫路支部では十二月十四日午後二時から姫路商工会議所で総会を開催した。

会はず田中支部長の挨拶のあと、担当幹事から年間事業報告、会計報告があつて一同承認した。校友会から出席した金本組織副部長は大学、校友会の現状を報告した。役員改選ではあらたに滝利幸氏が支部長に選ばれ、副支部長には加納忠雄、田中貞雄両氏が決定した。そのあと懇談会では支部組織強化問題や後輩の就職問題等につき意見を交換した。一同は記念撮影のち食卓を囲んで歓談し、万才三唱して散会した。

### 東淀川支部役員会

大阪東淀川支部では役員が決定したのを機に十二月十四日午後六時から「かたいや」で役員会を開催した。

まず矢野支部長から挨拶があり、支部を今後ますます発展させるため役員、会員の一層の協力を要望した。その後懇親会を開き、一同なごやかに話しあい支部を発展させるため全員が協力してゆくことを約して散会した。

昭和  
31年

## 校友名簿

在学時代の友を想うよすがに、  
また、卒業後の親睦連絡に、  
この一冊を備えて御利用下さい

— 収載人員二六、〇〇〇余名 —

B5判 六〇〇頁  
実費頒価五〇〇円  
(送料当方負担)

申込先  
**關西大學校友課**  
大阪市大淀区長柄中通二丁目  
振替大阪一二八七五番

昭和二十六年十月十五日第三種郵便物認可  
昭和三十四年一月三十日発行(毎月一回三十日発行)

關西大學學報 第三三三號 一月号

編集兼 久井忠雄

発行所

大阪市淀川区長柄中通二丁目

關西大學出版部

印刷所  
株式会社 ナニワ印刷所

電話(堀川)35(三〇七二番)  
振替大阪二六七七二番

電話(35)七七七一

## 昭和34年度 關西大學入学試験概要

学部	学科	(一部) (二部)		(出願期間及び試験日)	
		400名	300名	出願期間	試験日
法学部	法律学科			地方試験(高松, 福岡, 広島, 金沢, 名古屋各地)	
経済学部	政治学科			(一部全学部)...	昭和34年1月19日~2月18日
文学部	英国文学 文学 哲学 史学 仏文学 新聞学 新学 東洋文学	300名	150名	経済学部...	2月21日 2月24日
				法学部...	2月23日 2月25日
				商学部...	2月24日 2月26日
				文学部...	2月25日 2月27日
				工学部...	2月26日 2月28日
工学部	機械工学科 電気工学科 化学工学科 金属工学科	400名	150名	(試験科目) 法・経・文・商学部...国語、英語、社会、数学(簿記) (二科目選択) 工学部...理科(物理、化学の中一科目)、英語、数学	
		320名			

大学院	博士課程	研究科	専攻	(出願期間)	
				10名	昭和34年3月2日~3月23日
博士課程	法学研究科	国文学専攻 哲学専攻	公法専攻	4名	(試験日)
			私法専攻	3名	昭和34年3月26日、27日(2日間)
			金融経済・経済史専攻	60名	(試験科目)
修士課程	法学研究科	国文学専攻 哲学専攻 日本史学専攻	公法専攻	60名	博士課程...主論文、副論文、外国語 修士課程...論文、外国語
			私法専攻	60名	
			経済学専攻	50名	

なお、詳細については「昭和34年度關西大學學生募集要項」を参照されたい。

## 關西大學泊園文庫藏書書目

### 第二編

A5判 二八〇頁  
布クロス上製

關西大學西學部教授 壺井義正編  
大阪の庶民学苑を築いた藤沢東咳、南岳、黄鶴、黄坡先生と三世四代相繼がれた泊園書院の藏書を黄坡元本学名譽教授故藤沢章二郎先生が長年の縁を以て本学に寄贈せられたが、本書はその貴重な藏書書目の第二編である。  
なお、第一編は目下印刷過程中である。

### 目次

第一 卷一 經部	第一 諸經類	第六 地理類
第二 易類	第七 職官政書類	第七 書目金石類
第三 書類	第八 史鈔史評史料類	第八 圖表地圖類
第四 禮類	第九 諸子合刻	第九 諸子合刻
第五 詩類	第十 子類彙別類	
第六 春秋類		
第七 四書類		
第八 孝經類		
第九 諸經總義類		
第一〇 小学類		
第一 卷二 史部		
第一 正史類		
第二 諸史類		
第三 載記類		
第四 詔令奏議類		
第五 伝記類		
第六 地理類		
第七 職官政書類		
第八 書目金石類		
第九 史鈔史評史料類		
第十 圖表地圖類		
第一 諸子合刻		
第二 子類彙別類		
第三 諸子類		
第四 芸術類		
第五 類書類		
第六 勸善書類		
第一 楚辭類		
第二 別集類		
第三 總集類		
第四 尺牘類		
第五 詩文評詩文語類		
第六 詩典小説類		

刊行 關西大學出版部  
刊行取扱 關西大學出版部